東京大学大学院総合文化研究科
言語情報科学専攻
言語態研究会
第2号

言語態研究会
2023年度　会報

第 2 回 会報 「セ イ メ イ タ イ」開催報告

（企画：言語態研究会　運営委員）

言語態研究会は、2023 年 6 月 4 日（土）に、第 2 回研究交流会（「セイメイタイ」）を実施しました。ご多忙のなか、本イベントにご参加くださった皆さま、誠にありがとうございました。会報第二号では、本イベントの開催記録・開催報告をさせていただきます。こちらの会報が、研究会の会員同士の知の交流を広げ、活発に活動を展開していくことに少しでも役立てばと思います。

1. イベント趣旨

本会は、2022 年度（第 1 回）に引き続き、2023 年度も研究会の活発化を目的として会員同士が互いの研究内容やテーマを知り合う契機となるようなイベントを開催する運びとなりました。

第 2 回イベントのテーマは、「セイメイタイ」です。カタカナの「セイメイタイ」という表記から、頭のなかで「生命体」へと変換し、その意味で解釈しようとした方が少なくはないかもしれませんが、ここに込められた意味は、「生命体」のみならず、そうではない何かをも含むものです。

文学など言語芸術のなかには、様々な「セイメイ」が存在します。「セイメイ」とは一体何なのか、そしてその「セイメイ」のありように「タイ」はいかに結ばれるのかを皆様と考えたく、本テーマを設定しました。上記はあくまで内容にかかわる期待ですが、このような拡がりを持つ「セイメイタイ」というテーマで発表者の方々に個々の研究内容を共有していただくことを通じて、参加者の皆さまの自由な発想を触発し、個々の研究が深化されることを目指しました。

第 2 回会報では、各発表者、コメンテーター、参加者、運営委員より頂いたコメントを共有し、ささやかながら、第 2 回イベント開催の報告をいたしたく存じます。

2. イベントプログラム

開会 20:00-20:05　（秋山崚悟）

発表（1） 20:05-20:25　（長嶋皓太）

発表（2） 20:30-20:50　（板部泰之）

発表（3） 20:55-21:15　（浅野千咲）

休憩 21:15-21:20

コメンテーターによる発表総括・講評　21:20-21:35　（森田俊吾）

自由討議・意見交流 21:35-21:55

閉会 21:55-22:00　（西脇智也）

司会進行　安藤史帆

質疑取りまとめ・ファシリテーション　岡本佳奈

3. 各発表内容・発表者情報・発表後所感

発表（1） 20:05-20:25

吉田知子の小説における「糞」について――初期短篇を中心に

長嶋皓太／言語情報科学専攻博士課程二年

本発表（発表タイトル：吉田知子の小説における「糞」について――初期作品を中心に）では、吉田の小説に描かれる「糞」に着目し、吉田の文学における「引揚げ」の問題との関係を論じることを試みた。

まず「糞」が初期作品においては自己の存在の不確かさ、あるいは居場所のなさといったテーマとしばしば結びついていることを指摘した。「終わりのない夜」（1968）には、自己の分身としての「糞」への強迫観念が見てとれる。「糞」ないし排泄物は、主体にとってなにかしら〈すまない〉もの・ことを示しうる。そのことから、吉田が振り返り続ける引揚げ体験および引揚げをテーマとした作品に着目した。「引揚げ者収容所」（1972）には「引揚げ」を背景として、排泄物を通した他者・死者への接近、結合が見られる。「引揚げ」体験において、主体はしばしば身体の負の側面（空腹・排泄・病など）に直面する。吉田の「女の戦後史 第一回――引揚げ　今も傷口はふさがっていない」（1983）を取り上げ、引揚げ検疫（「上陸後検疫」）やその後の差別がいかに引揚げ当事者の吉田にとってトラウマ的であったかを示した。国家は、敗戦と同時に虱や疫病を伴って〈内地〉に戻ってくる「厄介者」を、いわば再度体内化する必要に駆られたと考えられる。引揚げ当事者にとって、検疫やその後の余計者扱い・差別は、自らを異物や汚れとして認識させられる出来事だったのではないか。引揚げ者がそのような体験を自らのものとして消化し、言語化するのに時間を要することは想像に難くない。吉田はエッセイ「幽霊の弁」（『客のいない家』所収、読売新聞社、1992 年）において、経験を反芻する当事者と、戦争を「時代劇」のような過去のものとして消費する社会との間に生じるずれを、自己が「幽霊」になってしまったかのような事態として叙述する。社会にとっては大昔の「時代劇」でも、当事者の自分はそれを現実として生きている以上、反芻・追体験する主体は「幽霊」のように場違いな（余計者的）存在にならざるを得ないのである。

最後に、以上のように導き出した「糞」と「幽霊」のテーマが、小説「常寒山」（1993）に見てとれることを述べた。同作では「分身」や「糞」的なモチーフが現れては消失する。病に冒され病床に置き去りにされたかと思えば夫たちの山登りに同行してもいる話者「私」の語りは、過去と現在、自己と他者、生と死の境界を攪乱する。異なる事物を結合させ、歪んだ時空を語りの現在において創出する小説「常寒山」には、「糞」や「幽霊」というテーマと結びついた境界攪乱の小説的手法が見出せるのである。歴史的な文脈を追えば、このような手法は「棄民」、「余計者」、「厄介者」、「汚物」などとして扱われ、忘却された「引揚げ者」の現実と響き合っていると考えられるのではないか。

発表後は様々な質問が寄せられ、大変勉強になった。とりわけ、引揚げとセックス、ジェンダーの問題、樺太という場の固有性と「糞」とのかかわり、といった論点が挙げられた。今後は樺太（及び満州）の固有の文脈にも焦点を当て、引揚げ当事者の体験をより具体的に考えたい。また、本発表から連想的にサミュエル・ベケットの話題が出たことは印象深い。「母親の身体から生まれた自らを排泄物と考える記述」が挙げられた。吉田知子の文学における「母親」の問題も、精神分析的観点から接続することができるかもしれない。今回取り上げなかった吉田の「豊原」（1967）はその観点から興味深いテクストである。

Key word: 吉田知子，糞，排泄物，引揚げ
発表者の専門分野・研究テーマ: 吉田知子，現代文学

発表（2） 20:30-20:50

眠る実存者、不眠者のエクリチュール——リルケ『マルテの手記』とレヴィナス

板部泰之／言語情報科学専攻博士課程二年

発表者の関心は、エマニュエル・レヴィナスの自己と他者をめぐる洞察を導きの糸として文学作品を読み、自己の内閉と開放の相克を論じることにある。本発表はそのような研究の一端を紹介するものだ。〈セイメイタイ〉というテーマに寄せて、「不眠」と「眠り」という契機に注目しつつ、R. M.リルケの小説『マルテの手記』（1910）を読解することを試みた。

〈生命体〉であるということ、それは単に「生命」（不定形の霊的エネルギーの如きもの）であるのではなく、物質としてのこの肉体に、皮膚の内側に、繋縛されているということだ。皮膚は私を外界から分離する防護壁である一方、外界と接触させる窓口でもある。このような特異な仕方で内に閉じつつも外へ開かれようとする〈私〉のあり方を、レヴィナスはその哲学的道程を通じてさまざまに言い表していたのだが、なかでも注目すべき形象が「不眠」と「眠り」だ。「不眠」とは、一切の事物の輪郭が見えなくなる夜の闇に取り囲まれ、自己の内外の境界さえ消失してしまうという恐怖に晒される経験にほかならない。一方そこから身を剥がし、己を確立するための避難所を確保することが「眠り」である、とレヴィナスは考えた。この議論は『手記』の骨格をなすマルテの不眠にも接続できるだろう。マルテもまた、内外の区分が崩壊することへの不安を、不眠の夜という場面に仮託して描写しているからだ。それどころか、そうした不眠の夜を徹して、不安に抗いながら書かれたテクストとして、『手記』は自己規定しているのだから。

テーマとなる巨大な概念に対して、文学の側から応答を試みるときには、つねに抽象と具体のあいだのどこに、その応答を位置づけるかという問題がつきまとう。〈セイメイタイ〉という問いに（「糞」「ゾンビ」「眠り」といった）特定の形象に着眼して答えるにあたり、それぞれを何かの比喩として考えるか、それともそのものの個別的な経験と考えるか。作者の実人生にどこまで還元するか。

交流会では、ほかの登壇者の方々が、テクストの具体的な描写に立脚しつつ、各々の仕方でこの難題に立ち向かってゆく軌跡を見せていただくことができた。またコメンテーターの森田先生、参加者の皆様からの

質疑を通じて、私自身、とりわけ哲学的言説と文学的言説の架橋を志す者として、この問題と真剣に向き合う必要を痛感した。今次の学びが、今後の私の研究を導く標のひとつになってくれると確信している。

Key word: 眠り，不眠，『マルテの手記』，ライナー・マリア・リルケ，エマニュエル・レヴィナス
発表者の専門分野・研究テーマ：文学・批評理論，哲学（他者論、特にエマニュエル・レヴィナス）

発表（3） 20:55-21:15

「人間であること」と「キリスト教徒であること」──フランケチエンヌ『デザフィ』 (Dézafi, 1975) における kretyenvivan「人」の表現考察から

浅野千咲／言語情報科学専攻博士課程二年

今回の発表では、ハイチの作家フランケチエンヌ(Frankétienne, 1936-)のハイチ・クレオール語作品 *Dézafi* を取り上げ、その中にみられる kretyenvivan「人間」という表現を軸に導出した読みを提示した。作品の背景を説明するため、最初にハイチの歴史と作家としてのフランケチエンヌの位置づけを概観し、次にフランケチエンヌが時に二つの言語を横断するかたちで行う「自作リライト」に言及した。そして先行研究における *Dézafi* の読み筋において重要となるハイチのヴォドゥにおけるゾンビ、ならびにこれに由来する文学上の表象について説明した。

しかし本発表ではゾンビよりも、作品のなかで数回回帰する「木々の白いもつれあいが、古い中庭の奥にさしかかっている。中庭にはめったに人が通らない」という部分に着目した。ゾンビの表象の陰に隠れて、*Dézafi* にはかつてヴォドゥ司祭＝宗教的権威であった人物の凋落、舞台となる集落を牛耳るヴォドゥ司祭である支配者の転落、キリスト教牧師の退廃など、いわば「聖性」の失墜が描かれていると指摘できる。すると上記の反復部は一見物語の内容には関連がないようにみえるが、「聖性」瓦解のイメージと結びつけることが可能であると提示した。

さらにここから上記の反復部に埋め込まれた kretyenvivan「人」という表現に焦点を絞り、次のような論を提示した。kretyenvivan とは現代ハイチ・クレオール語で「人間」を指す語彙である。*Dézafi* は 1975 年に発表され、その後 2002 年に再版された。この間に書き換えが行われているが、この表現は 2002 年版でのみ確認できる。1975 年版では vivan dé pié「二本脚の生きもの」という婉曲的・合成的な表現であったところが、2002 版で kretyenvivan へと変更されているのである。先行研究においてこの書き換えはクレオール語らしさと読みやすさを強化するためと説明される。しかし本発表では、先行するハイチ文学作品における、この表現に音声上対応する仏語彙 chrétien vivant「生けるキリスト教徒」の用いられ方と対照することによって、この作品の新しい読み方を提出した。すなわち、先行文学において chrétien vivant は何らかの信仰を持ち、信仰によって救済されることを信じる者を指す傾向にある。これと対照的に、上述した「聖性」の描かれ方を踏まえた時、*Dézafi* で用いられる kretyenvivan からは「人」以上の意味が読み取れない。作品全体としても信仰による救済が描かれることはなく、むしろ聖職者の聖性が堕落した先で起こる暴力が前景化する。結論として、*Dézafi* は信仰における幻滅を描き出した作品として読み直すことが可能であるという論を提示した。

以上が発表内容の総括である。最後に所感として、同じ場に臨んだ登壇者の方々の、糞というテーマと引揚げを、外界と切り離されて在ることと眠りをつなぎあわせ作品の読みを導き出すその手つきから、機能で考える、態を考えることの重要性に想到し、たいへん勉強になったことを申し添える。また余談ではある

が、Zoom チャット上の質問の中にあった「准える」の漢字が読めなかった。質問者が寛大な方だったので事なきを得たものの、嘆かわしかった。発表・討議の内容は勿論のこと、こうした常識・雑談・雑学のうちに入りそうな部分での学びがあることも、同年代で集まる研究会ならではの長所と考える。

Key word: 20 世紀ハイチ文学，フランケチエンヌ，ハイチ・クレオール語
発表者の専門分野・研究テーマ: 20 世紀ハイチ文学，フランス語圏文学

4. コメンテーター所感

言語態研究交流会に参加して

森田俊吾/奈良女子大学

第 2 回言語態研究交流会では、言語情報科学専攻に所属する 3 名の博士課程の学生が、それぞれ「糞便」、「眠り」、「ゾンビ（その背後にある聖性を欠いた人間）」といった、広く生命に関わるテーマで発表を行った。

長嶋皓太氏の発表は、吉田知子の初期作品における「引揚げ」というテーマを「糞」というモティーフと結びつけて捉え直すものであった。長嶋氏は、引揚げ文学の先行研究に加え、三木卓の作品や金塚貞文の人工身体論、フロイトや北山修の精神分析理論などの重要な文献を取り入れており、改めて文学における「糞便」というテーマの多面性を再確認させるものだった。とりわけ、短編「終わりのない夜」では、自らの分身と称する老婆と、最後まで使われない紙幣が、主人公の迫害不安を駆り立てる要因となっており、どちらも未消化の「すまない」もの、「心的負債」となっていることが精神分析の理論を用いて鮮やかに提示された。「終わりのない夜」のクライマックスにおける、主人公が自分の分身である老婆に向かって「あんたは私のウンコだよ」と嘲弄するシーンは、特に印象的だった。老婆＝「私の捨てた過去」＝汚物を、自分から切り離そうとするこの場面はジュリア・クリステヴァのアブジェクションを想起させる。しかし、老婆を棄却した後も、主人公のポケットには紙幣が残っている。引揚げ同様、「すんだこと」にはできない終わりのない戦いが吉田の文学にはある。

板部泰之氏は、こうした「終わりのない夜」（Nuit sans fin）をめぐる発表を「別の仕方」（Autrement）で引き継ぐ。「自己閉塞の文学」を研究テーマとする板部氏の発表は、エマニュエル・レヴィナスの「イリヤ」（Il y a）を着想源にしつつ、リルケにおける「不眠」のテーマを読み解くものだった。リルケの作品にはしばしば内省的・独我論的な傾向が指摘されてきたが、それは詩人にとって完全な閉鎖ではなく、「窓」のような媒介により外界との接点が保たれていたという。その例として挙げられるのが『マルテの手記』における窓と不眠の関係である。マルテは、外界の反応に対して敏感で、不安を抱く人物であったが、眠るときには必ず窓を開け、完全な静寂を望まなかった。これは外界から聞こえる音との繋がりを敢えて保つ自発的な行為であり、「イリヤ」の恐怖の闇に陥らないためのものであった。この点が、マルテの各場面の詳細な分析やリルケ本人の伝記的事実を通じて説得的に示された。リルケにおける「窓」という主題は、これまでも数多く論じられてきたが、板部氏のように「眠り」との関係で「窓」を理解する新鮮な試みは、彼がこれまでライプニッツやレヴィナスといった哲学者の「窓」の喩を研究してきたことから生まれた、独創的なアプローチの成果のひとつだと言えるだろう。

そして舞台はパリの夜からハイチへと移る。浅野千咲氏は、冒頭に「2 分で話すハイチの歴史」と題して、コロンブスのハイチ上陸から現代フランスにおけるハイチ文学の受容までを簡潔かつ明快に紹介し、聴衆をクレオール・ワールドへと誘った。浅野氏の発表は、フランケティエンヌのハイチ・クレオール語で書

いた作品『デザフィ』における一節の「書き換え」をめぐるものであった。発表では、当初« vivan dé pié »と表現されていた部分が、2002 年版で« kretyenvivan »へと変更されたことに着目し、それが西洋的な価値との決別の一形態である可能性が示唆された。クレオール語に明るくない私は、最初« kretyenvivan »を聞いたときに« créature vivante »の派生だと思っていた。しかし実際には« kretyen »がフランス語の« chrétien »（キリスト教徒）から音韻的に派生したものであり、« chrétien »という語に本来備わっているニュアンスは、フラケティエンヌの作品の中では聖性の堕落と対応するかのように消失していることが、発表では『デザフィ』の本文に即して詳細に示されていた。ハイチ・クレオール語の語彙形成過程にも目を向けながら、文学作品内に登場する語の固有の意味を浮かび上がらせようとする読解は、まさに言語学と文学の領域を横断する「言語態研究」にふさわしいものであった。

最後に私事となるが、発表者や企画者の中には、私が専攻の助教時代に留学や進路の相談、学内の業務で関わった方々が多くいらっしゃった。任期中、学生と対面で会う機会は限られていたが、それだけに出会った場所や話した内容を今でもよく覚えている。今回のように、研究の舞台で（もちろんそれ以外でも）、発表者や運営者らと交流する機会が持てることを楽しみにしています。

コメンテーターの専門分野・研究テーマ: 20・21 世紀のフランス詩，アンリ・メショニックのリズム分析理論と翻訳論の研究

5. 運営総括

自由討議ファシリテーター 岡本佳奈

今回の「セイメイタイ」というテーマは、その意味や表記において、第一回と同じく、いやひょっとするとそれ以上に捉えどころのない、難解なものだったかもしれない。だがこれもまた前回と同様に、運営委員の小さな懸念は杞憂に終わり、３名の発表者の方々と森田先生の議論は、思いもよらぬ形で生命というものの輪郭を描き直し、驚くほどの独創性と共にテクストの読解を開くものであった。また、会の進行における自分の役割に関連して小さな所感があったため、それについて述べたい。当日私は、参加者と発表者をつなぐ質疑応答セクションのファシリテーターを務めていた。夏休み期間である９月に開催した昨年と異なり、今回は春学期の最中である６月に会を開く運びとなった。そのため、学期期間中における会員の多忙さを考えた際に、どれほどの参加が見込めるものか準備段階において若干の不安があった。だが結果的には昨年と同等の規模の人数に参加していただいたばかりか、さらに会の盛況ぶりを示す一つの出来事があった。会の進行中、質問がある場合は岡本への個人チャットに送信してもらい、それらの質問を私が取りまとめ各発表者に送るという形式を取っていた。その最中、ある発表者への質問送信ができず、小さなパニックに陥った私が委員のグループラインで助けを求めるという一幕があった。理由は単純なもので、質問をまとめた文章が 2000 字を超えていたため、チャットで一度に送信できなかったというだけのことだった。些細な出来事だが、1 人の発表に対する質問が 2000 字を超えるというのは、参加者の熱量を表すに余りある例ではないだろうか。発表者、コメンテーター、参加者の篤実なやりとりが印象的な第二回であった。

イベントポスター作成 秋山崚吾

今回は、アルチンボルドの「四大元素」という絵をポスターのモチーフとして使用した。この作品では、数々の動物が一人の人間の顔を構成している。人間もまた、多種多様な動物があってこそ存在しうる一つの「生命体」であると示唆しているように思われ、今回のテーマにふさわしいと考えたのである。

とはいえ、テーマはあくまで「セイメイタイ」であり「生命体」ではない。当の絵画を採用することはイベントの内容を「生命体」の範疇に縮減してしまうのではないかという懸念もあったが、実際はそうはならず、さまざまな観点から「セイメイタイ」が議論されることとなった。発表者の方々とコメンテーターには大変感謝したい。

筆者にとっては、大学を離れてから初めてのイベント参加となった。主催者側がこう言うのもなんだが、テクストに触れる時間がなかなか取れないなか、こうしたイベントがあるのは非常にありがたいことだと感じている。学術的な場の創出という意味でもやはり、学外の人々へもイベントの裾野を広げていくことが望ましいだろう。これについては、今後のさらなる課題としたい。

6. 運営雑記

わたしが「セイメイ」に関して初めて思いを馳せたのはいつだったろう。テーマが決定され、まずわたしが考えたのはそんなことだった。

わたしの生まれ育った地域では、毎年春に弘法大師の命日に合わせて「弘法さん」という地域の集いが古びた御堂で開かれていた。地域の老女が手作りのお菓子を持ち寄って、知っている限りの南無阿弥陀仏やお経を唱える。ただそれだけのものだが、子どもにとっては、お菓子を貰えるというだけでクリスマスやお正月くらいのイベント感があった（とはいえ、わたしが変わった子どもだった可能性は多くある）。婆たちがこぞって念仏を唱える間、子どもたちは、その御堂の奥の林の中にある、夜逃げした人の空家に冒険に出掛けていく。「行ってはならない」と言われているから、これを読んだ読者には秘密にしてもらいたいものだが、屋根は半分朽果てて、室内が半分空けて見えてしまうようなボロさ加減でいつも春の風を室内に巻き込んで泣きわめくような音を立てていた。「この建物は死んでいるが生きているようだ」と思えば思うほどに恐怖は増すが、その恐怖は好奇心となって毎年ボロ家に向かわせる。空家は年を重ねれば重ねるほど、まるで痩せこけて肉が削ぎ落とされるように装飾が剥がれ、骨ばかりになっていった。そのときは、それほど深く考えたことはなかったが、中学生になって何年ぶりか久しく訪れたあるときに、無生物といわれるものと生物の重なり、その境界線の曖昧さに気付くことになる。久方ぶりに、小学生の子どもらに連れられて行ったその空家はさらに老朽化が進んでいたが、向こうで息を切らしながら海老のように背中を丸めて念仏を唱える婆たちの衰えや姿態に重なって見えてしまったのだ。そのとき、確固たる身体に確固たる精神みたいなものが吹き込まれて、一個の固有の誰でもないものとしてあったはずの「わたし」が、凄く曖昧な宙吊りのモノに見えてきた。あの空家の中に勝手に入り込んで障子に穴を空けてみたり、外から何かを持ち込んだり、彼（彼女）のうめき声を止めるために風避けを作ったり、、、あんな風に誰かが元居た体を借りた借りずまいかもしれぬし、今現在もはや知らない何かに侵入されているのかもしれぬし、あらゆるものの複合体の可能性だってある、、、これまでとは違った恐怖からその空家には近づくことができなくなった。筋違いな話かもしれないが、わたしにとっては、まずそんな記憶を呼び起こす機会になったことは間違いないだろう。

今回のイベントテーマ、「セイメイタイ」。それを聞いた（見た）人の脳裡にはどんなものが過るのだろう。普通「生命体」という漢字、それに伴うイメージが多くの人の頭に過るのではないか？非生物や死体と区別され得る実体（実態？）を持つものとして、あるいはそうした「生命」と名指されしものが生きていくための根源的なエネルギーがそれなのだと解釈されてきたはずだ。また、そういった定義が「生命とはいったい何か？」という問いを文理双方の学問分野のみならず、様々な領野において巻き起こしてきたことであろう。

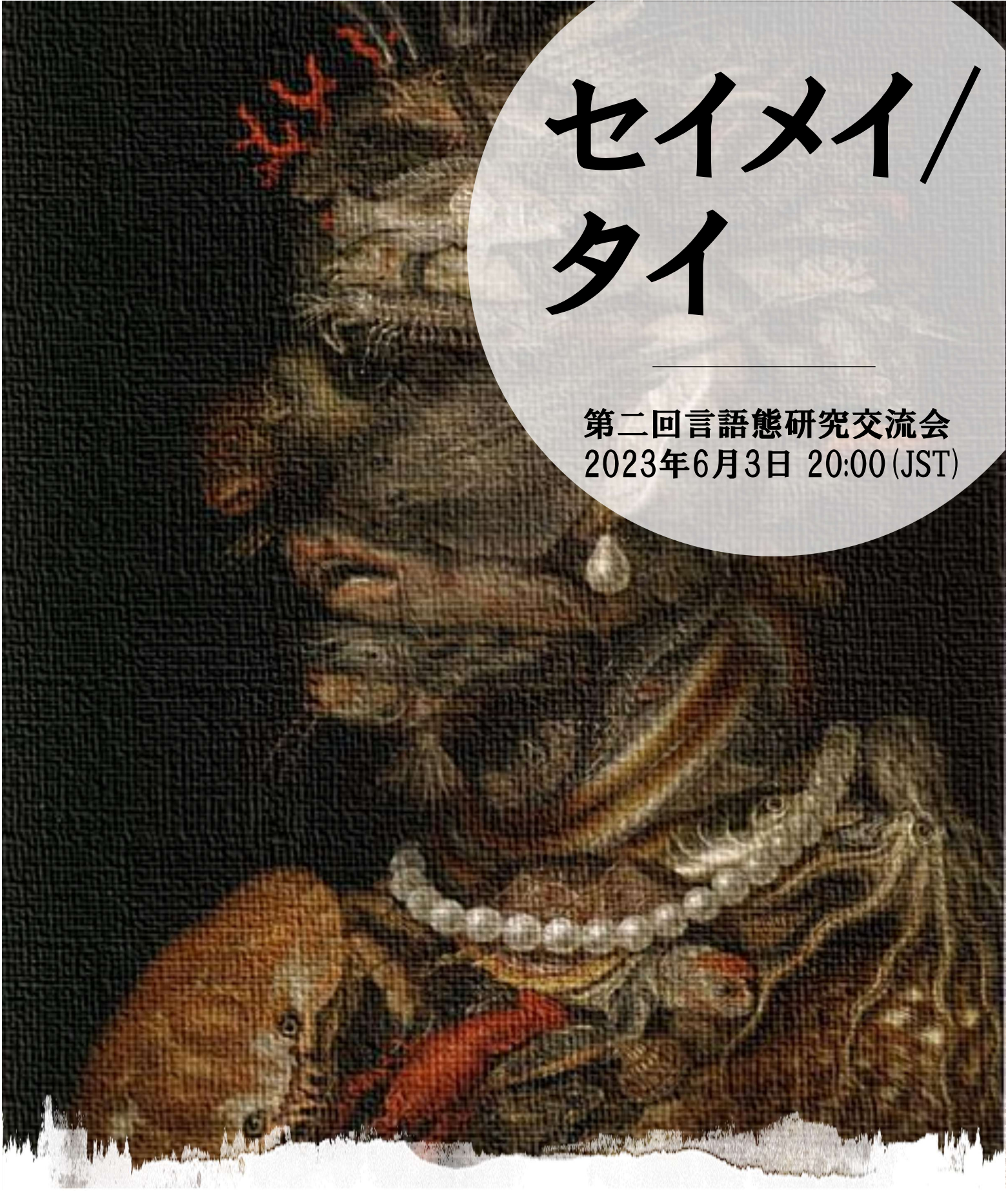
しかしながらその軌跡をたどり直せば、それが「生命」、とりわけ感情の伴う特権視された「人間」や、それを証明する「肉体」への執着の歴史であり、物語であったことをうかがわせる。今回のテーマ「セイメイタイ」には、不完全で判然としないものとしての「生命体」をいっそう不安定なものに変色させる「カタコト」さを有する表記が敢えて採用されているが、「生命」と固い繋がりで結ばれる「人間」ばかりでなく、たとえば、生き物のように見えるが生き物ではないもの、かつて生き物であったもの、「生命」とは正反対のどちらかというと忌避されるものであるにもかかわらず「生」に揺さぶりをかけるものへと視野を拡げたいという思いが込められている。このお題を提示された発表者の方々は、どのように変換するか、どのように分離するかにさぞ悩んだだろうが、面白いことに着眼点の異なる方向性の違った議論が展開されることとなった。「生命体」から排泄され忌避の対象となりながらも「生」とのかかわりを持ち続ける糞、別個のものとされながらも「生命」の再生や蘇生ともいえようゾンビという形象、「生」の内と外に広がる眠ること（らないこと）と「セイ」や「タイ」との接続。コメンテーターの森田先生のフィードバックとその後の参加者を踏まえた議論もおおいに盛り上がり、テーマ「セイメイタイ」を通して、そうした広く曖昧な地平にある「生命体」を、より広く多様でぼんやりとした、しかしながら確かな手触り、テクスチャ（質感）と様態の次元へと切り拓くことができたのではなかろうか。また、今回、言われ尽くされたと思われる事柄にしてみても、言葉の、言語の連なり、あるいは、その音の連なり

に、その個人の個人的体験の連なりが伴って、別の解釈可能性が生み出されることを改めて実感することにもなった。こうしたささやかな、それでいて個々の研究心を擽るような発見の多いイベントを展開していければと思う。（安藤史帆）

「セイメイ／タイ」とは？「セイメイタイ」ならある程度は聞き馴染みがある。「チキュウガイセイメイタイ」と映画や小説でいうときのアレだ。それがたった一本、「／」を入れてしまうことでおかしな感じになり、澱みなく流れるように発せられるはずの Sei-mei-tai（母音がすべて i で統一されていて声に出すとリズムの良い言葉である）に、何か繋がりが切られた感じが生じてしまう。「タイ」のとってつけた感が際立っており、t の口蓋の前部を弾いて出す硬めの音の響きもその印象を一層強めるのだろうか。ともあれ自分は漢語文化圏に生を享けて生活している身である以上、「セイメイ／タイ」なる表記の不気味さに当惑しながらも、「セイメイタイ」という聞き慣れた言葉の、これまたありふれた漢字表記である「生命体」を想起することはまっとうなことだ、と自分に言い聞かせておこう。そこで「セイメイ／タイ」は「生命／体」なのだ、ということにすると、「体」の「生命」へのとってつけた感、「体」から「生命」がバラけちゃう感が出てしまう。「体」と「生命」の繋がりがバラける時、その終局的なかたちは死というものだろうが、存外、もっと卑俗で日常的な次元で、僕たちはこの繋がりの意想外の脆さを目の当たりにするのではないか。「セイメイ」の高揚を味わおうとして飲む酒が原因で「タイ＝体」を壊し死に至るなど。「体」は「タイ」と同時に「カラダ」とも読ませるが、この後者の読みには「カラ」すなわち「空っぽ」であることが含まれる。大貫隆史ほか編『批評キーワード辞典』所収の「からだ」の項目では、「身体」と表記される際の「カラダ」の「ミ＝身」の充実感と「カラダ＝体」の空虚感が奇妙に両立される言語感覚が紹介されており示唆に富むのだが、僕たちは、日々「カラ」に向かっていく「カラダ」を意識的ないし無意識的な諸々の努力により満たすことで、「セイメイ」をなんとか各々の「カラダ」に繋ぎとめているのではないか。そのように考えると、「セイメイ」と「タイ」を切り離していた「／」も、「タイ」の方が「セイメイ」の方へ必死に伸ばそうとしてまだつかみ損ねている腕のようにも見えるから不思議だ。こうした「タイ」においてなされる「セイメイ」への努力の痕跡こそ糞便なのではないか。便器の水面の浮かぶ、さっきまで自分の一部だったものを眺める経験は、誰だって頻度の差はあれ日常的にしているだろう。肛門から押し出されるまで「カラダ」の一部を成していた糞便とは、生命の糧となる栄養源をとことん吸い上げられて「カラ」になったものである。糞便は体内環境の指標として役立つ一方で、自分が結局のところ従属栄養生物の「カラダ」しか持っておらず、水と空気と太陽だけでは充たされることができない以上、「カラダ」の中身が「カラ」にならないように努力せねばならず、自分の「セイメイ」が、摂食と排泄を通じて自分ではないものの存在に依存していることを見せつけてくる。あるいは、難病等により接触と排泄に重度の困難を抱えている場合には、文字通りケアという形で自分の「セイメイ」が他者の手へと委ねられる。糞便は、僕たちの「タイ＝体」が「セイメイ」に手を伸ばす過程における他なる「タイ」との交わりの痕跡でもあるようだが、清潔と規律をモットーとする近代的自己はこの痕跡を汚物とみなし、さっさと視界、いや、聴覚や嗅覚も含む自分を取り巻く感覚世界から消してしまいたがる。他人が使用した後のトイレに漂うムッとする臭いや、あまつさえ便器の排水の勢いが弱いせいで押し流されずに水面下に留まることもある糞便におぞましい気持ちを覚えるのは、そうした近代的自己の心性の証左だろう。肛門期についてのフロイトの言葉を引くまでもなく、幼児の発達過程においてトイレトレーニングが幾ばくかの重要性を占めており、成長しても「自分の尻は自分で拭け」と言われるように、糞便とその後始末を自分で済ませることは、近代的自己の成立と存外に関係が深いような気がする。イベント終了後三月以上が経過していて回顧的脚色が大いに含まれるうえに汚い話で申し訳ないが、ともかく「セイメイ／タイ」というテーマが提示された時に僕が抱いたイメージとしては、摂食、排泄、睡眠といった諸々の努力を通じてなんとか「セイメイ」にしがみつこうとする「カラダ」でしかない自分と、その事実をできるだけ見ないようにしてもっとご高尚なことをしようとする自分のなかの近代人的性質のギャップだった。

今回の第 2 回イベントに登壇者、コメンテーター、運営委員、参加者など様々な形で関わられた皆様のそれぞれに、「セイメイ／タイ」なる奇天烈な表記から触発された思考のイメージがあったのではないだろうか。当日のイベントにおける登壇者の皆様の発表は、そうしたイメージの多様さを示すものだった。長嶋さんは国家の「カラダ」から排泄＝排除される糞便として人間以下に切り下げられる引揚者である吉田知子の経験について語っており、質問させていただいたようにサミュエル・ベケットとの意外な相似が発見できたことに興奮を覚えた。板部さんの発表では生理的プロセスである睡眠を通じた自己の確立というレヴィナスのモメントを析出してリルケの読解へと接続しており、いわゆる「他者」の思想家の枠内には収まらないレヴィナスに出逢わせてくれた。浅野さんの発表は仏領植民地ハイチにおいて「人間」のステ

ータスを巡りなされたフランケチエンヌの文学言語をめぐるものであり、当地の文学に詳しくない身としては新鮮な発見をさせていただいた。講評とディスカッションも含め、初回の興奮と手探りの不安があった第１回に劣らない充実した内容のイベントになった。今回のイベントが、各人それぞれが抱える問いに対する思考を賦活する契機となったならば、望外の喜びである。（追記：イベントテーマは「セイメイ／タイ」ではなくシンプルに「セイメイタイ」だったことに今更ながら気が付いた。しかし「セイメイタイ」に関して述べておきたいところにさしたる変更もないので、このままで掲載させていただく。）（西脇智也）



セイメイ/タイ

第二回言語態研究交流会
2023年6月3日 20:00(JST)

＊登壇者：浅野千咲・長嶋皓太・板部泰之
＊コメンテーター：森田俊吾
＊当日のZOOMリンクは**こちら**（ミーティングID:847 3475 3560 / パスコード: 389730）。右の**QRコード**からもご参加いただけます。

主催:言語態研究会(東京大学 総合文化研究科 言語情報科学専攻)
言語態研究会HP:http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~gengotai/
連絡先:gengotai@phiz.c.u-tokyo.ac.jp

〈発表者/題目〉

長嶋皓太

吉田知子の小説における「糞」について――初期短篇を中心に

板部泰之

眠れる実存者、不眠者のエクリチュール

――リルケ『マルテの手記』とレヴィナス

浅野千咲

「人間であること」と「キリスト教徒であること」

――フランケチエンヌ『デザフィ』（Dézafi, 1975）における kretyenvivan「人」の表現考察から

言語態研究会 会報 第２号
2024年3月31日　発行
著　者　言語態研究会
東京大学大学院 総合文化研究科 言語情報科学専攻
〒153-0041 東京都目黒区駒場3-8-1
電話 03-5454-6376　FAX 03-5454-4329